

2000年代の障害福祉政策から障害者アートの状況を検証する

(-神奈川県内における新聞報道の言説分析-)

岸本拓也

1. 研究の背景

2016年（平成28）7月26日に神奈川県相模原市で発生した津久井やまゆり園事件を契機に、神奈川県では同年10月14日に「ともに生きる社会かながわ憲章」が制定された（神奈川県）。神奈川県では共生社会の実現に向けて、憲章や共生社会の理念の普及・広報のためにさまざまな活動を行っている（神奈川県「憲章や共生社会の理念の普及」）。ダウン症の書家・金澤翔子が揮毫した「ともに生きる」のメッセージは、県内各所でポスターやチラシとして掲示されている（神奈川県『ともに生きる社会かながわ推進週間』）。また、脳性麻痺のヴァイオリニストである式町水晶を「ともいきマイスター」に任命し、憲章の広報活動に協力を得ている（神奈川県『週刊ともいき』）。このように神奈川県では芸術の力を借りて共生社会の実現を目指す取り組みが進められている。その一つが「ともいきアートサポート事業」であり、障害者の文化芸術活動の普及支援を行っている（神奈川県『ともいきアートサポート事業』）。では、神奈川県内における共生社会は実現しているのだろうか。本研究では、福祉政策の転換点であった2000年代の新聞記事の言説分析を行い、現在へ通じる障害者アートの当時の状況を明らかにする。

2. 障害者アートの歴史

1945年（昭和20）にフランス人画家ジャン・デュブッフエによって提唱されたアール・ブリュットは「生の芸術」を意味し、正規の芸術教育を受けていない人々が技巧や流行にとらわれず自由に純粋な表現を行う芸術として位置づけられた（服部）。日本では障害者アートがアール・ブリュット、あるいはその英訳であるアウトサイダー・アートとして紹介されるようになった（服部）。

3. 先行研究

和久井は、朝日新聞における障害者アートの言説を1930年代から1990年代まで年代別に整理している。要点は以下のとおりである。

1930年代～戦前：障害者アートは更生や教育の契機として位置づけられた

1950年代：障害者の作品は憐れみや励ましの対象として扱われた

1970年代：市民運動の高まりとともに、障害者は「心に重荷を負う存在」とされ、それを乗り越える創作として語られた

1980年代：自立概念と結びつき、社会参加の機運とともに心情的な訴求が強まった

1990年代：個性の尊重が強調される一方、素朴さや原初性が強調され、普遍的人間性と結びつけられた

しかし、和久井の研究では2000年代以降の分析が行われていない。本研究は、神奈川県立図書館の「神奈川県関係記事・文献譲歩索引」に採録された県内関連の新聞記事のうち、「障害」と「アート」を記事本文に含む2000年代（2000年～2009年）の記事は10編あった。10編のうち障害者の作品を公開したアート展の様子を伝える記事は6編あり、障害者施設関係者や障害者施設利用者のコメントが記載されていた4編を言説分析の対象とした。

4. 2000年代の障害者福祉の状況と神奈川県内の障害者アートの言説

1990年代から2000年代にかけて、障害者の自立・社会参加を重視する政策転換が進み、就労支援や地域生活支援が強化された。従来の大規模施設中心の支援から、地域生活を基盤とする支援へと移行する潮流が形成された（黒岩）。神奈川県内でも、こうした政策的背景のもとで障害者の文化芸術活動が活発化した。具体的には以下の事例が挙げられる。

● アートかれん（現・アート・メープルかれん）

2002年（平成14）に地域作業所として開所し、同年からアート展を開催している。神奈川新聞に、新藤所長が「障害者という枠組みにとらわれず、自由な心で作品そのものを楽しんでほしい」と述べている（「障害者と若手アーティスト競作 港北区の地域作業所『アートかれん』」神奈川新聞2002年5月22日 朝刊）。

● 翔の会（茅ヶ崎市）

1985年（昭和60）に作業所として開設され、2001年（平成13）にアート展を開催している。施設長の斎藤は「地域の中に素晴らしい仲間がいることを知ってほしい」と語っている（「障害者17人個性の競演 心の中のアート感じて 茅ヶ崎で施設合同 絵画160点並ぶ」神奈川新聞2001年11月19日 朝刊）。

● 障害者相談サポートセンター「あすなろ」（横須賀市）

2008年（平成20）にギャラリー展示を実施している。自閉症で利用者の河野は「描くのは大変だけど、絵は好き。いろいろな人に見てもらいたい」と述べている（「アートに

光る個性 障害者支援の相談室『あすなる』 利用者の美術作品展示が好評」神奈川新聞 2008年11月15日 朝刊)。

● 地域活動ホーム「いぶき」(横浜市磯子区)

2009年(平成21)に障害者の等身大自画像を区役所で展示している。出品者の金野は「たくさんの人に見てもらえてうれしい。これからも描いていきたい」とコメントしている(「筆の動き迫力満点 障害者らが肖像画展示 横浜」神奈川新聞 2009年10月4日 朝刊)。

これらの記事から、2000年代の神奈川県では、地域作業所の開設とともに障害者アートが地域社会に開かれ、「市民に見てもらおう」ことが重視される言説が現れていたことが読み取れる。

5. まとめ

本研究では、2000年代の神奈川県内の新聞記事を対象に障害者アートの言説を分析した。その結果、障害者アートが地域社会に開かれ、市民に鑑賞されることが重視される傾向が確認できた。一方で、鑑賞者側のコメントはほとんど見られず、障害者アートが市民にどのように受容されていたのかは明らかではない。今後の課題として、鑑賞者の受容や意識の変化を把握するための調査方法の検討が必要である。たとえば、アンケート調査、インタビュー、展示会場での観察など、多角的なアプローチが考えられる。

参考文献

- 神奈川県. 「ともに生きる社会かながわ憲章」. 『神奈川県』,
<https://www.pref.kanagawa.jp/gikai/p1077751.html>. アクセス日 2025 年 10 月 25 日.
- 神奈川県. 「ともに生きる社会かながわ憲章ポータルサイト」. 『神奈川県』,
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/cnt/f535463/index.html#hukyuukeihatu>. アクセス日
2025 年 10 月 25 日.
- 神奈川県. 「ともに生きる社会かながわ推進週間」. 『神奈川県』,
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/syuukan.html>. アクセス日 2025 年 10 月 28 日.
- 神奈川県. 「ともいきアートサポート事業」. 『神奈川県』,
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/tomoikiartsupport.html>. アクセス日 2025 年 10 月 25
日.
- 服部, 正. 『アウトサイダー・アート』. 光文社, 2003 年.
- 黒岩, 祐治. 『嫌われた知事』. 幻冬舎, 2024 年.
- 和久井碧. "障害者のアートはいかに語られてきたか: 1930 年代から 1990 年代の新聞報道の言説分
析." *社会デザイン研究* 1 (2025): 91-103.
- 「障害者と若手アーティスト競作 港北区の地域作業所『アートかれん』」. 神奈川新聞 朝刊 横浜
版 2002 年 5 月 22 日 18 面
- 「障害者 17 人個性の競演 心の中のアート感じて 茅ヶ崎で施設合同 絵画 160 点並ぶ」. 神奈
川新聞 朝刊 横須賀・湘南版 2001 年 11 月 19 日 18 面.
- 「アートに光る個性 障害者支援の相談室『あすなろ』 利用者の美術作品展示が好評」. 神奈川新
聞 朝刊 横須賀版 2008 年 11 月 15 日 25 面.
- 「筆の動き迫力満点 障害者らが肖像画展示 横浜」. 神奈川新聞 朝刊 2009 年 10 月 4 日 21 面